

助け合いのコミュニティづくりに奔走するのは「好きだから」

■ 母親の介護で体感した地域社会の奉仕精神

「なんでうちの母のために、地域の皆さんはここまで一生懸命にサポートしてくれるのか？」

60歳定年前に、母の介護・看取りでの実体験が、現在のセカンドキャリアの原点と語るのは公益財団法人さわやか福祉財団（東京都港区…以下、当財団）の玉置英明さん。玉置さんは、新卒入社総合化学メーカーで38年間、営業を皮切りに支店長やマーケティングを担ってきた生粋の企業人である。60歳定年後も再雇用で会社に残る選択肢もありましたが、定年の前年の母親の余命宣告と父親の介護問題のなかで、地域包括支援センターや、ケアマネージャー、ヘルパー、看護師、NPO法人の方など、大勢の方に支えてもらったそうです。「第二の人生は、奉仕や社会貢献にかけたい」との思いが日増しに強くなり、気が付けば、当財団の採用面接でその思いをぶつけていたそうです。

■ 地域に触れるきっかけは地元少年サッカークラブ

会社員として多忙な毎日を送っていた玉置さんですが、実は20年前に、自閉症やADHDなど発達に難しさのある子どもたちのサッカークラブの代表コーチに招か

れたのが、地域社会との初めての接点だったそうです。その時の思いを「子どもたちの目がキラキラと輝いていました。そこには健常者と障がい者との壁はありませんでした。損得でつながらずではなく、『サッカーが好きだから』でつながっていたのです。子どもたちにはサッカーだけではなく、社会で生き抜くための礼儀や挨拶などのルールも身に付けて欲しいと思いました」と語ってくれました。21年目以降も変わらず続けており、パワーの源だそうです。

■ 地域共生社会づくりに向けて、多様な参加者をつなぐのが現在のミッション

玉置さんは現在、当財団の社会参加推進事業の担当リーダーとして、経済団体、大企業、中小企業、自治体、地域包括支援センター、大学教授など多様な参加者を取りまとめながら、企業OBや現役勤労者の助け合い活動への参加、地域で支える仕組みづくりに奔走されています。玉置さんは、初対面の面談を最も重視しているそうです。「こちらの理念を理解してもらうことも大事ですが、それ以上にお会いいただく方や会社のことをより理解したうえで、助け合い活動への参加をお願いする。それは最低限の礼儀だと思っています」と続けてもらいました。そんな玉置さ

んを見ていると、長年の会社員時代の蓄積をいかしながら、新しいフィールドで夢中になって頑張れる理想のセカンドキャリアモデルではないかと思いました。



玉置英明さん

池口武志(いけぐち・たけし)

一般社団法人定年後研究所 理事 所長

1963年生まれ。1986年日本生命保険相互会社入社。現在、株式会社星和ビジネスリンク取締役常務執行役員、キャリアコンサルタント(国家資格)としても活動中。著書として『定年NEXT』『人生の頂点は定年後』がある。

**一般社団法人定年後研究所**

人生100年時代の中で、中高年社員のセカンドキャリアの充実に向けた調査活動を展開中。定年前後の自走人生にチャレンジする会社員と、それをサポートする企業を応援。当記事へのご意見ご感想を、ポータルサイト <https://www.teinengo-lab.or.jp>「お問合せ」にお寄せください。

当ページのバックナンバーは、上記サイトをご覧ください。